



今回は国際フィールドスクール・イン・礼文島の参加記録です。

## ◇ 北海道礼文島の浜中2遺跡で、北海道大学主催の国際共同調査に参加しました

日 時：平成28年8月14日(日)～18日(木)  
場 所：北海道礼文郡礼文町 浜中2遺跡  
内 容：考古学、分子生物学、人類学、動物学、環境科学等の共同調査  
参加者：関高生4名、引率教員2

## ◇ 発掘調査や遺物整理、専門家のセミナーに参加し、学問の最前線に学びました

■ 毎年夏、礼文島に世界各国の研究者や学生が集まり、国際フィールドスクールが開かれています。北海道大を中心に、慶応大、カナダ・アルバータ大、ハーバード大、ハワイ大、ロシアのイルクーツク大や極東連邦大等、約 70 名が参加。関高生の参加は 3 年目になります。

■ 調査初日 (15 日) は、まず、礼文町立郷土資料館の見学。北大の岡田真弓先生 (考古学)、蓑島栄紀先生 (歴史学) から展示に関する説明を受けました。発掘現場では、縄文時代やオホーツク時代の土器や石器、海獣骨の出土状況に感動、海の狩人たちの暮らしぶりに思いを馳せました。



■ 夜は北大の近藤址秋先生 (文化人類学) から、カナダ先住民 (アサバスカン・インディアン) のヘラジカ猟やビーバー猟のお話を、驚きの動画とともに、楽しくうかがいました。

■ 二日目 (16 日) は終日発掘調査に参加。関高生の指導はハーバード大学大学院のゾイさん。オホーツク文化期の層の掘り下げや、出土遺物の選別作業に参加しました。根気よく包含層を掘り下げると、土器片や石器片、イヌの犬歯、アザラシの腕骨などが土の中から現れました。遺物の選別作業では、各国の学生と英語でコミュニケーション。最初は緊張しながらも次第に打ち解けて話ができるようになりました。



■ 三日目 (17 日) の午前は引き続き発掘調査、午後は遺物の整理を手伝ったあと、金沢大の佐藤丈寛先生から、DNA 分析の講義を受けました。はるか北方から移住してきたオホーツク人。彼らとともにやってきたオホーツク犬やカラフトブタにまつわる DNA 分析のお話は驚きの連続。学問の最前線に触れることができました。



■ 四日目 (18 日) の朝、発掘現場で北大の加藤博文先生、アルバータ大のアンジェイ・ウェーバー先生にお礼を申し上げ、発掘現場そして礼文島をあとにしました。

■ 百頭を超えるゴマフアザラシの群れ。石器素材となった頁岩を産する山肌や砂浜。入り江の海岸砂丘に位置する現在の集落立地。フィールドワークの大切さを肌身で感じた五日間でした。

## 参加した生徒の感想

■今回の礼文島研修で、まず驚いたのは日本の歴史に関心のある外国の方がたくさんいたことです。日本の島の発掘だから日本人中心かと思っていたら、現場では常に英語が飛び交っていました。現場の説明はもちろん英語。出土した遺物について聞くにも英語。日本語が聞こえてくる事はほとんどありませんでした。

私は、あまり英語が得意なほうではありません。また、人見知りしてしまう性格のため、初めの方は、分からないことを聞くことができませんでした。しかし、外国の方が気づいて分かりやすい英語で言い直してくださいました。それでは研修に来た意味がありません。そんな時に英語の便利さに気づきました。英語は日本語と同じで、単語だけでも伝わる言葉があります。出土した遺物が土器か石か区別がつかなかった時に思い切って **What is this?** と聞いてみました。すると、微笑みながら「ただの石」と日本語で返されました。それからは、まだ少し緊張があったものの **Pottery?** と、聞くことが怖くなくなりました。

研究施設の作業では、出土した土器や骨を綺麗にする作業をしました。クリーニングをしながら土器を見てみると、土の重さに耐えかねて小さくなっているもの、お椀の口の部分だと分か

るものがありました。今、私たちが使っているお皿や湯呑み、お茶碗などは、昔から多少の変化があったものの縄文時代の人々が使っていたものと似ていると分かりました。また、考古学とは宝探しではなく、文化を継承するための学問であると感じました。**出土品を丁寧に取り出し、ブラシを使って砂を落とす。その作業に神経を使いどんな小さな欠片でも大切に扱う。その欠片から読み取れることを読み取り推測する。それが今日の日本史や世界史となり私たちが学んでいると感じました。**



■今回の研修で学んだことが大きくふたつあります。

一つ目は、積極性を持つことです。それは、外国語での交流や、専門的な話を聞いたあとの質問などから学びました。外国語での交流では、**はじめは英語も苦手で、自信が持てず、話しかけようと思っても、相手が怖くて、なかなか話しかけられませんでした。でも、このままだと駄目だと思い、話しかけてみました。そうしたら、黙り込んで作業されていた方も、すぐ、明るく話してくれて、会話も弾みました。そこで、話しかけないと、相手の気持ち、性格など、何もわからないから、相手との仲を深めていくためにも積極性は大切だと感じました。**

また、専門的な話のあとの質問も、質問する前は、「このくらいの質問なら別にしなくていいかな」という気持ちでした。でも、疑問に思ったことを素直に質問したら、少しの質問から、とても話を膨らまして、多くの知識を与えてくださって、「やっぱり質問してよかったな」という気持ちになりました。



ふたつ目は、「物事を学んで行くうえで、理系や文系などの学問の壁は関係ない」ということです。例えば、今回の調査は、「考古学の調査だから文系的なことをするんだろうな」と自分の中で思っていました。でも、いざ調査に参加すると、骨から生物の種類、部位、どのような状態か、を探り、そこから、人々の生活との関係性を考えたり、その時代の人々の暮らしと現在の暮らしとを比べてみたり、他の地域との違いをくらべてみたりと、一つの学問ではまとめられない、色々な視点での調査がおこなわれていて、そこから、学問の壁のないことに気づきました。しかし、その中でも、専門的な知識が必要とされてくるので、自分も、一つの的にしぼられずに、様々な分野の学習をするべきだと思いました。



今回の研修では、積極性、様々な分野に対応できる知識を、身につけるべきだということをまなびました。僕は、2年生から、理系に進もうと思っています。そして、大学では、今回の研修で、海にすむ生物、魚や海獣などの、生態やかかわり合いそしてその生物とどう人間がかかわっているかを学びたいと思ったので、生物、特に海洋生物について学んでいきたいと思いました。そして、将来はそれを社会のために生かして行けるような人間になりたいです。

■僕が礼文島研修に参加した理由はふたつあります。ひとつは元々日本史に興味があったこと。もうひとつは礼文島には外国人の研究者や大学生の方々が沢山来ています。だから、英語が公用語になっています。英語を話す度胸をつけ、自分の視野をもっと広げたいと思ったことです。

最初、研究施設で遺物の整理をさせて頂きました。ここで一番心に残っていることは北大の学生さんと話すことができたことです。高校時代の勉強、センター試験、今の大学生活など、いろいろな話をすることができました。北大の皆さんは自分のやりたいことを存分にやって、同じ思いを持つ仲間とともに頑張っていて、生き生きとした印象を受けました。

午後には島の博物館を見学しました。その帰りに**北大のTさんと話しをしました。Tさんは、「せっかく外国人の研究者と関われる機会があるのだから、もっと英語で話しかけなければいけない」と言われました。またTさんは外国人の方と僕たちが話をするきっかけを作ってくださいました。他県の高校生のためにそんな素晴らしいことができるなんて、彼はカッコいいと思いました。僕もこのような気遣いのできる人になりたいです。**3、4日目は発掘を行いました。ここで思ったのは、研究者の方々が一番発掘を楽しんでいるということです。本当に目が輝いて生き生きしていました。僕もあんな風に自分のやりたいことに没頭したいと心から思いました。



礼文島で学んだことはふたつあります。ひとつは英語の重要性です。研究をする時はすべて英語でした。伝わらないことが多かったですが、諦めずに話しかけて伝えられることもありました。そのときの喜びはとてとても大きなものでした。英語が話せることで世界が本当に広がります。僕は英語が苦手です。しかし、絶対に英語をペラペラにします。そのために今勉強を頑張ります。もうひとつは、自分はやっぱり歴史が好きだということです。歴史系の学部に進学したいと心から思いました。目を輝かせる研究者の方々や学生さんのおかげで本当の自分を見つけられるとても有意義な研修になりました。

■はじめは、礼文島がどのようなところか知りませんでした。しかし、行ってみると自然がとてもキレイなところだなあと思いました。調査では、多くの外国人を含む研究者の方がいて驚きました。また、考古学の調査といえば発掘調査しか知らなかったのが、遺物の管理、洗浄など様々な種類の活動があると知りました。



一番印象に残ったのは、『英語』についてです。**日本の方、韓国の方、ロシアの方皆が英語でコミュニケーションをとっていて、グローバル社会での英語の重要性をよく知れました。また、英語で話すことの楽しさも同時に知ることができました。**今後の目標として、北大の大学生の方がおっしゃっていた目的をもって積極的に行動するという心掛け、活動していこうと思いました。